

【暗証聖句】「アブラハムは多くの日を重ね老人になり、主は何事においてもアブラハムに祝福をお与えになっていた。」創世記 24 章 1 節

【日・モリヤ山】

ヘブライ人への手紙 11 章 17 節「信仰によって、アブラハムは、試練を受けたとき、イサクを献げました。つまり、約束を受けていた者が、独り子を献げようとしたのです」

創世記 22 章に、モリヤの山で、アブラハムが一人息子のイサクをささげる場面が出てきます。神はなぜこのようなむごいことを要求されたのでしょうか。愛する我が子をささげることなどできる親などいません。そもそも、神は人をいけにえとしてささげることを禁じています。ましてや、イサクをささげてしまえば、子孫が星のようになると言われた約束はどうなるのでしょうか。これはアブラハムが 100 歳に近づき、もう子供など生まれるはずがないと神の約束を疑がったことに対する試練でした。本当につらい試練でした。しかし、モリヤの山に到着するまでの 3 日間、アブラハムは必死に祈っていくうちに、ある確信に至るのです。それは、イサクはたとえ死んでも復活するということでした。ローマ 4：17-18 に次のように書かれています。

「死者に命を与え、存在していないものを呼び出して存在させる神を、アブラハムは信じ、その御前でわたしたちの父となったのです。彼は希望するすべもなかったときに、なおも望みを抱いて、信じ、「あなたの子孫はこうになる」と言われていたとおりに、多くの民の父となりました」。

アブラハムはたとえイサクをささげたとしても、神は復活させてくださると信じたのです。「希望するすべもなかったときに、なおも望みを抱いて、信じ」たのです。これが信仰です。イエス様は、「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。」(ヨハネ 11:25-26) と言われました。復活信仰は、私たちの信仰の絶対的土台にあるべきものです。

【月・主は備えてくださる】

イサクがアブラハムに、「火と薪はここにありますが、焼き尽くす献げ物にする小羊はどこにいるのですか」と尋ねると、アブラハムは、「わたしの子よ、焼き尽くす献げ物の小羊はきっと神が備えてくださる」と答えます(創世記 22：7, 8)。イサクを不安にさせないために言ったのでしょうけれども、原語のヘブライ語を直訳すると、「神はご自身を小羊として備えられる」となるのだそうです。つまり、主ご自身が私たちの身代わりとなって、犠牲になってくださるという救いの御業が暗示されていたのです。

主は私たちの必要に答えてくださる方です。実際、アブラハムがイサクに手をかけようとしたとき、み使いが現れ、「その子に手を下すな。何もしてはならない。あなたが神を畏れる者であることが、今、分かったからだ。あなたは、自分の独り子である息子すら、わたしにささげることを惜しまなかった。」(創世記 22 章 12 節) と語り、イサクの代わりにお羊を備えてくださいました。このお羊は御子キリストを象徴していました。つまり、主が私たちの必要を満たすために備えてくださる究極こそ、ご自身なのでした。主がアブラハムにこのような試練を与えられたことに関して、「人類のあけぼの」上 P161 に次のように書かれています。

「神がアブラハムにその子を殺すように命じられたのは、アブラハムの信仰を試すと共に、彼の心に福音を現実的に強く印象づけるためでもあった。あの恐ろしい試練の暗黒の数日間は、人類の贖罪のために払われた無限の神の大犠牲をアブラハムが自分の体験によって学ぶために神が許されたのである」人類のあけぼの上 P161

この試練は神様を疑ったアブラハムの信仰を試すのみならず、福音とは何かを、人類の贖罪のために払われた神様の無限の愛の大きさを、強く印象づけるためだったのです。

【火・サラの死】

アブラハムがイサクをささげるという大きな試練の後に続く物語は、サラの死です。「サラの生涯は百二十七年であった」(創世記 22：1) と書かれています。イサクを産んでから、37 年生きたということになります。ところで、サラはアブラハムがイサクを捧げようとしたことを知っていたのでしょうか。人類のあけぼの上 P155 を見ると、「アブラハムは、自分の心中を彼女に打ち明けて、この恐ろしい責任を彼女にも共に負ってもらいたいと思った。しかし、彼女は、自分を妨害するかも知れないと恐れて思いとどまった」と書かれています。アブラハムはサラに打ち明けたいという思いを持ちながらも、サラを心配させたくないという思いもあったことでしょう。またイサクをささげることに反対するかもしれません。そう考えると、打ち明けるべきではないと思い、サラには内緒でモリヤの山に向かったようです。でも、無事にモリヤの山から戻ってきたときに、アブラハムは伝

えたかもしれません。皆さんはどう思いますか。もし皆さんがアブラハムの立場だったら、どうしたでしょうか。あるいはサラの立場だったら、どうしてほしかったでしょうか。ただ、この試練は主がアブラハムに与えられた究極の試練であり、サラに与えられたものではありませんでした。神様の御前に一人立つべきときと、誰かと共に重荷を共有すべきときがあるということです。

アブラハムは、サラのために胸を打ち、嘆き悲しみました（創世記 23：2）。そして、サラを埋葬するために神様が与えると言われた土地を、奇しくもヘト人から購入することになります。

【水・イサクの妻】

サラの死に続く創世記 24 章では、イサクの花嫁探しが書かれてあります。アブラハムはイサクの花嫁探しを信頼のおける僕に託すのですが、異教徒のカナン人からではなく、アブラハムの故郷であるハラ地方のナホルの町から花嫁を探させるのです。そして、故郷で見つけた花嫁をカナンに連れてくるようにと命じるのです。花嫁候補は、まず同じ信仰を持った者であり、同時にカナンという異国で生活しても良いというものでなければならなかったということです。この大役を仰せつかった僕は主に祈ります。その祈りはとても具体的なものでした。創世記 24 章 13、14 節「泉の傍らに立っています。この町に住む人の娘たちが水をくみに来たとき、その一人に、『どうか、水がめを傾けて、飲ませてください』と頼んでみます。その娘が、『どうぞ、お飲みください。らくだにも飲ませてあげましょう』と答えれば、彼女こそ、あなたがあなたの僕イサクの嫁としてお決めになったものとさせてください」

僕は、心の優しい思いやりのある女性がイサクの花嫁にふさわしいと考えたのでしょうか。主はこの祈りに答えてくださり、リベカが泉にやって来て、水を見ず知らずの僕とラクダに飲ませてくれるのです。リベカは、アブラハムの兄弟ナホルの息子ベトエルの娘でした。その後、僕はリベカの家を赴いて、事情を父ベトエルと兄ラバンに話し、リベカもこれを受諾したため、彼女をつれてただちにイサクの元へ帰ってくるようになります。人間の自由を尊重しながらも、神様の摂理を感じさせる物語です。リベカもその家族も、その神様の摂理を感じ、素直に従ったのでした。当のイサクは、「リベカを愛して、亡くなった母に代わる慰めを得た」（創世記 24 章 67 節）と書かれてあります。

【木・アブラハムの妻】

創世記 25 章 1 節に、「アブラハムは、再び妻をめとった。その名はケトラといった」と、アブラハムが再婚したことが書かれてあります。ケトラは、歴代史上 1 章 32 節で、「アブラハムのそばめ」と書かれてあり、サラとは明確に区別しています。ガイドの著者はケトラはハガルの可能性があること示唆していると書いていますが、はっきりしたことはわかりません。はっきりしていることは、ケトラはアブラハムの子供を 6 人も産みますが、神の民として選ばれたのはサラの子イサクであり、その子孫であったということです。このことは、アブラハムも理解しており、全財産をイサクに譲った（創世記 25 章 5 節）り、「側女の子供たちには贈り物を与え、自分が生きている間に、東の方、ケデム地方へ移住させ、息子イサクから遠ざけた」（創世記 25 章 6 節）ことからもうかがえます。しかし、それでもアブラハムはサラの死後、イサクと同様にケトラから慰めを得たのは確かです。